



書評

[評者]

岩田 健太郎

神戸大学医学研究科感染治療学分野・教授

微生物プラチナアトラス 第2版

岡 秀昭 編著
佐々木 雅一 著

●B5変 頁256 2023年9月
定価：5,500円(本体5,000円+税10%)
[ISBN978-4-8157-3085-7] MEDSi 刊



本書の帯に「このアトラスは美しい写真集」だ、とある。驚くべきことに、巻末にはその美しい写真の撮影法が解説されているのだ。著者がコロニーや微生物を「美しく」撮影することに並々ならない情熱を燃やしていることが分かる。確かに、ブドウ球菌や酵母様真菌コロニーの「テラテラ感」の美しさは、本書の特徴をよく表現している。感染症屋は微生物に魅せられたフェチシストが多いから、満足するのではなかろうか。

だが、本書の真価はそこにはない、と僕は考える。繰り返されるのは「検査室に通え」というメッセージだ。そこで、こうしたコロニーやグラム染色を直視できますよ、と述べているのだ。そこで大切なのが散りばめられた「臨床上的ポイント」である。微生物検査は手段であって、目的ではない。数々のコロニーや顕微鏡的知見が患者の病態にどのようなインプリケーションを持ち、どのような対応が求められ、そして患者のアウトカムにどう影響するのか。美しい写真が「意味するところ」が詳しく解説されているのが、本書が類書と大きく区別されるべき特徴だ。細長い *Fusobacterium* の写真の下に、「咽頭炎ののちに、発熱が続き、血液培養で本菌が検出されればレミエール(Lemierre)症候群を疑う」(p.184)と書かれているのがいいのだ。

多くの医者はアドホックに検体を提出し、検査室に検査を要求するが、その結果が何を意味するのか(インプリケーション)を案外、理解していない。それは時に看過してよいコンタミネーションだったりするし、患者の生死に大いに影響する重大な知見だったりする。両者を峻別するのに最も重要なのは、検査室に足繁く通って検査技師の先生たちに教えるを請うことだ。そして、教科書を読むこと。つまるところ、本書はアトラスであり、かつ臨床の教科書なのである。

質量分析により、多くの微生物はコロニーの性状やグラム染色に頼らずとも同定できるようになった。それでも、肺炎球菌のように検鏡できても培養で生えないこともあるし(p.20)、zone edge testのようなコロニー上の所見が正しい抗菌薬を選択させることもある(p.13)。集中治療室にいる患者の重篤な肺炎の治療効果はグラム染色「だけ」が教えてくれることも多い。医学医療の進歩とともに、細菌検査室との連携はますます重要になっている。

本書には付録として多くの動画も紹介されている。アクセスに若干手間がかかるので、できればYouTubeに普通に公開してほしいところだ。書籍と動画の連携も今風で、今後はこういう医学書が増えていくだろう。